HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アメリカ・カナダの旅
Author(s)	城戸, 孝昌
Citation	新ひぐま通信 別冊 : 第7回国際クマ会議報告書, 31-34
Issue Date	1986-08-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91581
Type	report
File Information	kikou_kido.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

§3 紀 行 文

アメリカ・カナダの旅

城 戸 孝 昌

2月19日 PM7：05 我々は夕闇の成田空港をシアトルへ向け出発しました。クマ研にとっても、私にとっても、初の海外進出という実に思い出深い日となったのです。ついに日本を離れたという不安と、それを数段上回るいよいよアメリカに行けるという期待に胸ふくらませた出発でありました。そうして8時間の飛行の後、アメリカ大陸が眼下に広がり、ついに来たのです念願の地アメリカに!! ところが、外国に来たと言ってもまだまだ日本の息がかかっているというか、がっかりさせられたこともありました。機内での日本語放送に始まり、空港における日系人による日本語の案内と、便利ではありますがアメリカに来てまで日本語が使えるとは何か変なものです。しかし後になって、今度は日本語なんて誰も知らない、日本のことをハワイの向こうにあるのかというぐらいの認識しか持っていない人達の所へ行くとは知らずに、実に贅沢な悩みを持っていたもんだなと思いました。さてまずその日の宿ですが、とにかく費用節約をスローガンに掲げていた我々は、値段オンリーという条件のもとにPacific Hotelという所に泊まったのです。悪く言えば何もない（風呂もトイレも共同）良く言えば60年代アメリカを彷彿させるような部屋でした。まあそれはいいのですが、ゴキブリ君の登場には驚かされました。それに追い打ちをかけるかのごとく、夜になってヒーターも切れ、あげくは持参の寝袋をひっぱり出す人まで出るありさまで、実に快適な部屋でした。明けて翌日、いよいよ会議開催地であるウィリアムズバーグに向かい出発したのであります。シアトル→シカゴ→リッチモンドと乗り継いでリッチモンドに到着した時はすでに夜の9時をまわっていました。前日の睡眠不足がたたって疲労はピークに達しており、とにかく早く宿をとの声で、TAXIの運ちゃんと交渉の末、ウィリアムズバーグ郊外のモーテルに泊まることにしたのです。都会と田舎の差なんでしょうが、実に格安の値段で前日とはうって変わって豪華版のホテルでありました。

21日、いよいよ会議初日です。午前中にRegistration（登録）を済ませ午後はアメリカクロクマの研究者達のWorkshopを聞きましたが、生の英語を目の当たりにして、正直言って面くらってしまい、自分の語学力のなさを改めて痛感しました。

22日はいよいよ我々クマ研のリーダーAさん、Mさんの発表です。内心大丈夫かなとこちらがひやひやしていたのですが、両氏ともいつの間にと思うほど実に流暢な英語で、普段の

会話がうそのようでした？

23日は1日かけて野外見学に出かけました。各国の研究者達が、会議では見せなかった実にいい顔をしていたのは印象的でした。26日の午前中で会議も終わり、その日の夕方私は同行のTさん、O_1さん、O_2さんと4人でワシントンD.Cに向かったのです。到着したのが午後7時頃と遅かったのでホテルに荷物を置き4人で例のごとくハンバーガーを食べに出かけたのです。そこでの失敗というか珍談を1つ。私がサラダを注文したところ皿を1枚くれたので、ああサラダバーかと思い日本の感覚で何度もおかわりをしていると、3杯めを取りに行った時、店員が急いで走ってきて、“You are three times.”（あなたは3度も取りにきている）“This is only one!”（これは1回限りです）と血相を変えてどなってきたのです。しかしよく考えてみるとよく3回目まで我慢してくれたもんだな、と思いました。あるいはまさか3回は来ないだろうと思って2回目までは許してくれたのかもしれませんが、今思い出してもあの時の事は思わず笑ってしまいます。ちなみにこれは私とO氏の2人での出来事であります。

27日は1日中博物館まわりをしました。中でも前評判の高かったスミソニアン博物館（自然史博物館）は日本のそれ、例えば大阪、長居公園のものとはまさしく比じゃないの一言です。よくぞここまでこれだけのものをそろえたなと驚くと同時に、感心してしまいました。日本にもあそこまでとは言いませんが、一歩でも近づくような博物館を作ってもらいたいものです。又この日の夜、渡米後初めて食べたごはん、それは中華料理だったのですが、実においしいもんでした。

28日いよいよ世界№1 Cityニューヨークに乗り込んだのです。やはり何かにつけて世界の中心というだけあってそのスケールの大きさには驚かされました。しかし私の抱いていた都会の雑踏というイメージはなく、町の中心のセントラルパークには無数のリスがたわむれ、町には緑も多く、日本の都会とはまったく違っています。しかし、期待していたブロンクス動物園では、冬場で寒かったせいもあり、クマやほとんどの動物を見ることができませんでした。ただニューヨークでも、国立自然史博物館はワシントン同様すばらしいものでした。

3月2日からはO_1さん、O_2さんと別行動となり、単独でカナダを回ることにしました。3日にナイアガラを経由してトロントに入りました。トロントには会議で知り合ったCaroline Deayという研究者がおり、会いに行ったのです。しかし連絡もせずに突然行ったため連絡がなかなかとれず、4日の夕方になってやっと連絡がついたのですが、私の出発の日だったため結局直接には会えませんでした。しかし論文やら資料やらを送ってもらう約束をしてきたので、それがせめてもの救いと言えばそうなんですが！

4日の夜行バスに乗って次の目的地であるモントリオールに向かいました。5日の朝モントリオールに着き、その日は1日町を歩き回り、夜は明日からの汽車旅（今回のアメリカ・

カナダ行きで会議の次に楽しみにしていたもので、モントリオールからバンクーバーまでおよそ6000kmの行程を3泊4日かけて走るという世界でもシベリア鉄道に次ぐ第2番目の長距離列車であります）に備えて、スーパーに食料を買い込みに行きました。そうしたところその店の主人の韓国人のキムさんという方が日本語の達者な人で、話しこんでいるうちに彼が以前ハンターであった事、クマを撃ったこともあるなどいろんな話を聞くことができました。実際彼が仕留めたムースの鼻や熊の掌（スーパーの冷凍庫に保管してあった）などを見せてもらい、おまけに食事に連れていってもらったりと、不思議なぐらいの大歓迎を受けたのです。彼に言わせると、といってももう60才近いおじさんですが、昔日本語を勉強していたそうで日本人の友人も多く、久しぶりに日本人に会えてうれしかったとの事です。しかし私にしてみれば思わぬ歓迎を受け、本当にラッキーでした。

翌6日からは前述の通り、3泊4日の汽車旅の始まりです。6日朝9：30、私を乗せた列車は一路バンクーバーへ向けてモントリオールを出発しました。モントリオールを離れてしばらくすると、そう時間にしてAM 11：00を過ぎる頃にはもう大自然の真っただ中です。車窓からは、ムースやエルクといった、本でしか見た事のなかった動物を見ることができ、本当にこれは現実なのか、夢でも見てるんじゃないのかと思う程のすばらしさでした。その日の夜は、Observation car（列車の天井がガラスばりでその列車全体が俗にいうサンルーフ型式となっているもの）で過ごしたのですが、こんなにも星というのはきれいなものなのか、と改めて感じる程、まさしく自然がかもしだすプラネタリウムでした。そんなこんなで初日はうれしくてうれしくて、夜も眠れないほどでした。

2日目はうって変わって、砂漠のど真ん中を突走りました。列車の左右には地平線が広がり、どこまでもほとんど植物らしい植物は生えていない大不毛地帯が続いていました。西部劇にでも出てきそうなまさしく荒野の地です。3日目はバンフ・カルガリーというカナダでも有数の大森林地帯を通りました。ほとんど1日中、どこまで続くのかと思うぐらいの山々と、それを囲む森林とを見ることができました。山は1日の間にいくつかの顔を持っていました。朝は朝日に輝いて、実に新鮮で1日の始まりを告げるかのごとくやさしい姿を現し、昼はとても険しく厳しい表情でした。何者もよせつけない山のすごさみたいなものを感じました。圧巻は夕陽の沈むころです。山が真赤になり、いかにも燃えているかのような何かとてつもないスケールみたいなものが感じられました。我々が住んでいるこの地球にもまだこんな所が残っているんだな、と思うほどのすばらしい景観でした。

4日目の3月9日の朝にバンクーバーに着き、すぐその足でアルバータに向かいました。ここでは、大学の先生に紹介していただいたOlds CollegeのDr. Kundussenという獣医師に会い、大学の設備、実習風景などを見学させて頂きました。その後再びバンクーバーに戻り、そこで自転車を購入し、バンクーバー郊外から山間部を廻ったのですが、ここではすぐ

目の前でムースに会うことができ大感激でした。まさしくカナダの大自然をこの目で確かめれたようなそんな気分でした。又、バンクーバーのスタンレーパーク動物園では、ホッキョクグマ、ハイイログマのキーパー（飼育係）と話すことができ、大変参考になりました。

そして、シアトルに戻りここでは前日に連絡しておいたウッドランド動物園に行き、Billというコディアククマのキーパーに1日案内していただきました。ニューヨーク・ブロンクス動物園もそうだったのですが、アメリカの動物園は国土のせいもあるのでしょうが、何故こんなにも大きいのかと思える程大きいのです。そのせいか動物も実にのびのびしているように見えました。

その後シアトルの町を見物し、そこでもたまたま入った店で知り会ったJohnという方に親切にしていただき、市内観光、あげくは帰国の日に空港まで送ってもらうという、実に恵まれた今回のアメリカ・カナダ行きでした。

ちなみにバンクーバーで買い求めた自転車は日本に持ち帰り、現在北海道で大活躍中であります。

なにぶん文章力のない私などが書いたものでうまく表現できない部分もあるのですが、自分ではできる限り貪欲に何でも吸収しようという気持ちで行ったので、そういう点で実に良かったと満足しております。それよりも本文では触れませんでしたが、各地で買い求めた多くの本を読むことに熱中している今日この頃です。